

グラフで見る名大生 [8]

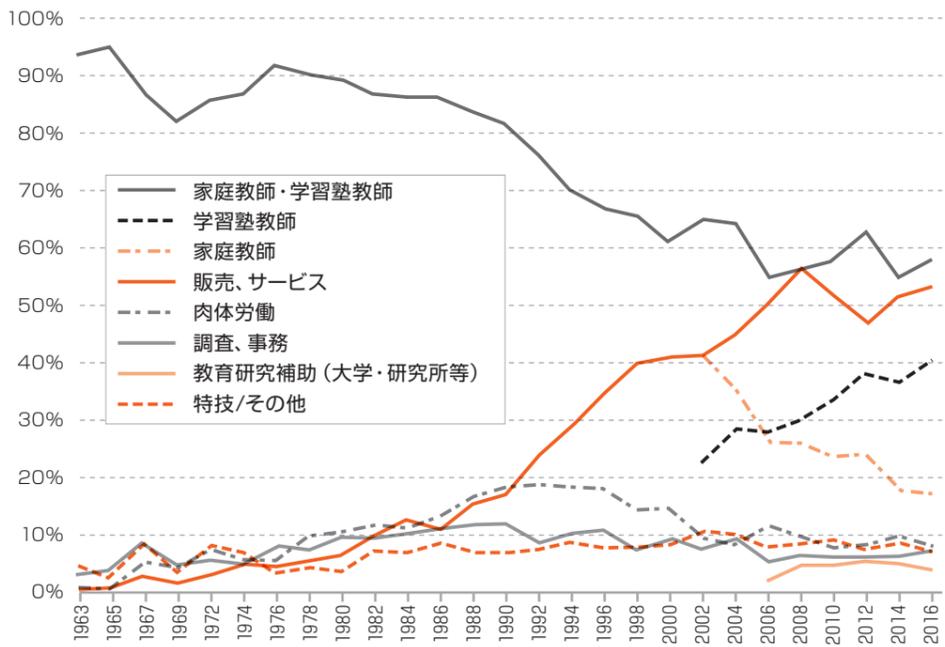
アルバイトの職種は、50年間で どう変わったのか？ (学部学生)

1963年(第1回)から2016年(第27回)までの「学生生活状況調査」を用いて、名大生のアルバイトの歴史をみていきます。その中でも、今回はアルバイトの職種に注目します。グラフは、学部学生が行ってきたアルバイトの職種の変化を示しています。アルバイト従事者は、「家庭教師・学習塾教師」、「販売・サービス」、「肉体労働」、「調査・事務」などの選択肢から、職種を選びました(複数回答可、第7回調査からは、三つまで選択可能)。

グラフを見ると、1980年代後半までは、「家庭教師・学習塾教師」が8割を超えており、他の職種と比べて突出していたことがわかります。1990年頃になると、「販売・サービス」が増加する一方で、「家庭教師・学習塾教師」は減少しました。しかし、2008年を除けば、「家庭教師・学習塾教師」はアルバイトの職種第1位を守り続けています。

2002年調査以降、「家庭教師・学習塾教師」が「学習塾教師」、「家庭教師」に細分化されたことによって、両者の内訳もみることができます。2006年になると、「家庭教師」は、「学習塾教師」に逆転されました。それ以降も、ほぼ一貫して増加している「学習塾教師」とは対照的に、「家庭教師」は減少の一途をたどっています。

(藤井利紀)



【データ】各年度の『学生生活経済生活状況調査報告書』(東海国立大学機構大学文書資料室所蔵)、『学生生活状況調査報告書』を参照。2006年以降、「教育研究補助(大学・研究所等)」が新たな選択肢として加わった。調査年度によって職種名および職種区分が異なる場合があり、グラフ作成の都合上、同一の職種として扱ったところや職種区分を再編したところがある。

高等教育研究センター

かわらばん

秋号

名古屋大学
高等教育研究センター
ニュースレター第72号

コロナ禍における 学生調査の動向と教訓

―満足度と学修時間の年次比較を中心に―

「コロナ禍への対応として、多くの大学でオンライン授業をテーマとした学生調査が実施されてきました。結果が公表されている調査については、広島大学の教授学習支援リゾンセンターがリンク集をまとめています。また、国立情報学研究所の「4月からの大学

等遠隔授業に関する取組状況共有サイバースポジウム」でもいくつかの調査結果が報告されています。本稿では、これらの調査から得ることのできる教訓を、「満足度や学修時間が昨年度からどのように変化したのか」との点に基づいて考えてみたいと思います。

授業の満足度と理解度は僅かに向上、学生生活の満足度は低下

まず、満足度についてです。茨城大学の調査では、授業の満足度と理解度が、僅かながら昨年度よりも向上した、という結果が出ています。また、立教大学経営学部の調査では、双方向型のオンライン授業における満足度、理解度が、昨年度の対面授業での調査結果を上回ったと指摘されています。他の大学の調査でも、教員との「コミュニケーション機会(チャット等を含む)」が確保されている授業ほど、満足度が高い傾向にあることが示されています。

度に比べて学修時間が増加しています。従来型の試験の実施が困難となったことに伴い、多くの授業が各回の課題提出に基づいて成績評価を行うようになった、などの背景があると考えられます。

他方、既に一般メディアでも報じられているように、学生からは「課題が多すぎる」と不満が示されています。実際、多くの大学の調査でも、オンライン授業で困ったことの筆頭に挙げられているのが、課題の多さについてです。ただ、授業時間と授業外学修時間を合わせた平均値は週40時間に満たないか、あるいは少し上回る程度であるとの分析結果も出されています(東京大学、北海道大学)。日本の大学の単位制度は、1日8時間、週40時間の学修時間を想定しています。この意味では、コロナ禍における学修時間は、概ね制度の想定範囲内であるとも言えます。

説明が行われていないこと、学修に想定以上の時間を要する層へのケアが不足していること、あるいは、学生間での相談や情報交換ができないことへの不安、などが原因として生じているのかもしれない。

学生が課題量の増加に納得するためには、課題の意義や内容等についての丁寧な説明やフィードバックが重要であると考えられます。北海道大学の報告でも、「フィードバックがないため、レポート作成で進歩が感じられないまま、ただ作成するだけになっている」という学生の声が紹介されています。また、想定以上の学修時間を抱える学生への対応や、学生間での交流機会の確保は、授業担当者のみでは克服が困難です。学修時間が適正となるよう、な力キリキラムの見直しや、学修支援体制の確立、相談・交流環境の整備など、大学組織としての対応が求められると云えます。

他方、学生生活全体の満足度については、昨年度の値から低下しているとの結果も、九州大学の調査から示されています。大学に対する満足度が最も高まるのは、授業、交友関係、課外活動のそれぞれの満足が得られる場合であると、以前より指摘されています(浜島 2017)。そのためには、学生間、学生と教員間の交流確保が重要ですが、対人接触が制限される状況で、いかに学生間の自発的な交流機会を確保するかについては、課題が残っていることを示唆する結果です。

学修時間は増加傾向、負担感も大きい、制度の想定範囲内？

次に、学修時間です。東京大学、北海道大学、茨城大学の報告において、年次比較が公表されています。いずれの結果でも、昨年度に比べて学修時間が増加して

「課題量に対する納得のいく説明、フィードバックの重要性、多様性の配慮」

とはいえ、平均値なので、週40時間をこえる学修量を抱える学生も含まれます。これらの学生へのケアが必要であることが、東北大学や北海道大学の報告において指摘されています。学生の不満は、課題の急増に対して納得でき

学生が納得して取り組むことのできる授業課題の設定や、学生の多様性に対応した環境整備は、従前からの大学教育の課題でもあります。オンライン授業においては、その必要性がより鮮明になっていくと云えます。コロナ禍の学生調査から得ることのできる教訓の一つではないかと考えます。(丸山和昭)

次年度、年次比較が公表されています。いずれの結果でも、昨年度に比べて学修時間が増加して

「課題量に対する納得のいく説明、フィードバックの重要性、多様性の配慮」

とはいえ、平均値なので、週40時間をこえる学修量を抱える学生も含まれます。これらの学生へのケアが必要であることが、東北大学や北海道大学の報告において指摘されています。学生の不満は、課題の急増に対して納得でき

かわらばんへの皆さまの「意見・感想」をお寄せください
Eメールアドレス info@csh.nagoya-u.ac.jp

Higher Education Glossary

高等教育にまつわる用語集

学問の自由

Academic Freedom

「学問の自由」とは、一般に、①何を研究するか、②何を発表するか、③何を教えるかについて、制限や介入を受けないという自由を指します。この自由があってこそ学問は発展し、ひいては社会がよりよい方向を目指せるという認識のもと、欧米を中心として世界の高等教育に浸透している理念です。とはいえ、現実には、国や社会からの要請と綱引きの状態にあります。

また、研究倫理や研究公正、研究者の社会的責任などの面から、制限を受けるところがあります。たとえば、倫理委員会で認められた研究計画でなければ実施できない、盗用は許されず引用の表記を行わなければいけないと各所で規定されている、学協会の綱領等において軍事目的の研究には関わらないことを掲げている、といったことです。

また、文化的・政治的背景によって、その意味する範囲は異なってくることがあります。独裁国家における大学人の「不自由」は、想像しやすいところでしょう。ちなみに日本では、日本国憲法第23条に「学問の自由は、これを保障する。」と明示されています。初等・中等教育においては最大限にこの自由を享受することはできない(すなわち、一定範囲は認められる)とする判例や、発表と社会運動との境界に関わる判例があります。

ドイツには、また別の、「学ぶ自由(Lernfreiheit)」という固有の伝統があるそうです。学生側にも学問の自由があるという概念です。新型コロナウイルスが世界中で流行する現在、どのように学ぶかについての自由が一定の制限を受ける事例が多くみられます。せめて、何を学ぶのか、誰から学ぶのか、そんな学生側の自由度を高めることができたらよいのにと考えさせられる概念です。

自由には責任が伴うものです。上記のような検討をすることは、教授することの自由と対にされるべき、教育する側の責任であるという見方もできます。「学問の自由」とそれに伴う責任とを同時に考察することは、この自由をより深く理解するのに欠かせないものと考えられます。(齋藤芳子)

欧州高等教育圏で進む高等教育改革と 質保証をめぐる動向

2020年8月に、欧州高等教育圏(EHEA)で高等教育の質保証を推進する4団体(欧州高等教育質保証協会(ENQA)や欧州大学連盟(EUA)等)は共同声明を発表しました。この中で、「欧州高等教育圏質保証基準ガイドライン」(ESG、2015年改訂)が、高等教育の質保証のツールとして有効性を維持しており、加盟各国がこれを活用して高等教育の改革や質保証をさらに進展させることを促しています。

ESGは、2005年に、EU高等教育圏の質保証の枠組みとして加盟国高等教育大臣会議により採択されました。その後、域内外の高等教育をめぐる状況をふまえて、その修正作業が、上記4団体等により進められ、2015年に現在の改訂版に至りました。質保証の方針プログラムの設計と承認、学生中心の教育と評価、教員の能力開発と採用、学習資源と学生支援、情報管理等の内部および外部質保証や質保証機関について包括的な基準ガイドラインを示しています。

近年、欧州諸国では高等教育改革が急速に進行しています。とくに注目される動きとして、eラーニングの比重拡大(「コロナ禍で従来以上に拡大」)、「マイクロ・クレディシヤル」(特定領域の知識スキル取得を目的とする短期プログラムとその修了証)の普及、「欧州大学イニシアチブ」(欧州各国の複数大学が連合体を形成、相互の資源やEUの補助金を共有活用して研究・教育等を共同で発展させる計画)があります。

これらはいずれも、従来型の高等教育のあり方を大きく見直すものであり、欧州だけでなく世界各国の高等教育制度政策に大きな影響を与えています。各国地域間の競争がそれに拍車をかけています。この中で、各国と各高等教育機関が高等教育の質を維持・向上させるためには、明確な方針を持った政策とともに貫いた高等教育評価基準が必要になっていきます。今回の声明は、このような状況の中でESGが引き続き有効性や実施可能性をもちえるかどうかを、上記の質保証関連4団体が検討した結果を示しています。ESGが、教育の質保証という目的に合致しており、高等教育機関やその質保証システムの変化や多様性拡大にも十分対応しうると思っています。さらに、ESGの内容を狭く解釈せず柔軟に解釈し活用すること、より適切な質保証のあり方を模索するために、多様なステークホルダーを巻き込んで検討を行うことを呼びかけています。(夏目達也)

センターによる各種セミナーや新刊などの情報をメールでお知らせしています。本サービスへのご登録は、下記ウェブサイトよりお申込ください。
http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/service/info_form/

読んでおきたい

この1冊

Great Books on University

『菜根譚』

洪自誠 著 今井宇三郎 訳注
岩波書店 1991年

書名の菜根とは、「人よく菜根を咬みえば、すなわち百事なすべし」という故事に由来しています。これは、「菜根は堅くて筋が多い、これをかみしめるようにすれば、ものの真の味わいがある。そして、苦しい境遇に耐えることができれば、人は多くのことを成し遂げることができる。」という意味です。

『菜根譚』は、中国明代の著述家である洪自誠が著した随筆集で、前集222条、後集135条からなっ

ています。彼は儒教・仏教・道教の三教を修めており、読みすすめていくと編毎に儒教・仏教・道教のそれぞれの影響を見ることができます。

洪自誠が生きた明代末期は、内乱や政争が相次いだ時代で、彼自身、優秀な官僚として活躍した後、政争に敗れて隠遁生活に入ったと言われています。前集の一編に、「人生に処して、真理をすみかとして守り抜く者は、往々、一時的に不遇で寂しい境遇に陥

る…」と記述してあるあたりにも、著者自身の境遇や、そのような境遇にあっても忘れない向上心を感じることができます。

また、前集の七十四編には「一苦一楽して、相磨练し、練極まりて福を成さば、その福始めて久し。」とあります。これは、「苦しんだり楽しんだりして、就業を重ね鍛錬して作り出した幸福であってこそ、その幸福は永続する。」という意味です。本年は、新型コロナウイルスのこともあって落ち着いて勉学に集中できないことがあるかもしれませんが、先の言葉を思い出して、学問・研究に打ち込みたいものです。

当時の時代背景を元にしてのことから、現代にはそぐわない内容もあるでしょうが、一方で参考になることも多いと思います。機会があれば、手に取っていただければと思います。(北栄輔)

高等教育研究センタースタッフ (2020年10月現在)

センター長 北 栄輔 専門領域: 情報学、機械工学、計算科学
教授 夏目 達也 専門領域: 高等教育学、技術・職業教育論
准教授 中島 英博 専門領域: 高等教育マネジメント
准教授 丸山 和昭 専門領域: 教育社会学、高等教育論、専門職論
助教 齋藤 芳子 専門領域: 科学技術社会論
研究員 藤井 利紀 専門領域: 教育史、高等教育論

客員 YANG, Cheng-Cheng (台湾 国立嘉義大学)
鈴木 克明 (熊本大学教授システム学研究センター)
島 一則 (東北大学大学院教育学研究科)
杉谷 祐美子 (青山学院大学教育人間科学部)

名古屋大学高等教育研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
Tel 052-789-5696
Fax 052-789-5695
E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp
URL <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/>